

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 多肥周辺を訪ねる

講師 大嶋 和則（高松市文化財専門員）

日時 令和7年3月15日(土)

共催

高松市文化財保護協会

高松市教育委員会

目次

1	多肥の地名	2
2	船頭神社	2
3	高木城跡と乃生氏（喜多家）	3
4	西蓮寺墓地	6
5	香東川旧河道と多肥の出水	7
6	野郷神社	10
7	円成庵（観音堂）と香川県指定有形文化財木造六字明王立像	11
8	櫻木神社	13

1 多肥の地名

多肥地区は高松平野のほぼ中央に位置します。地名の由来については、古代に大和朝廷の直轄領である屯倉みやけが置かれ、その耕作農民である田部たべが存在したことにより、田部が多配たへに、さらに多肥たひに転化したと言われています。古代においては、「和名類從抄わみょうるいじゆしやう」において「多配郷」とあり、香川郡十二郷の一つです。

中世においても「多配郷」の記録が散見できますが、江戸時代初期では香川郡東の多肥村に該当します。『寛永十七年（一六四〇）生駒氏惣高覚帳』によると、村の石高は千三百五十二石で、近在の村々の中でも際立って多く、寛永十九年（一六四二）高松松平家の治世になる頃、上多肥村・下多肥村の二ヶ村に分村されました。

明治二十三年（一八九〇）には上多肥村・下多肥村の二ヶ村と出作村の一部が合併し多肥村となり、旧村名を継承した三大字が編成されました。昭和三十一年（一九五六）に高松市と合併し、大字はそれぞれ多肥上町、多肥下町、出作町となっています。

2 船頭ふなと神社

『香川県神社誌』によると、櫻木神社の境外末社で、祭神は塞さいの神、境内坪数六坪、崇敬人員百名となっています。古老の話では、「おなかさん」と呼んで、八月二十一日を例祭としています。塞の神とは、村の境にあつて、

他から侵入するものを防ぐ神で、ふなと岐の神と同じ神とされ、岐を船頭と書くようになったものと思われます。また、道祖神の原型の一つともされています。しかし地域では、付近で火事が起きても大事に至らず直ちに消火できたことから、火災から守ってくれる神として崇敬しています。

昔はお祭りが盛大に行われ、神社前の道の南北約百メートルにわたって、氏子が作る凝った飾り人形などが並び、夜は今でいう寸劇に相当する「にわか」や漫才も催されたそうです。

3 高木城跡と乃生氏（喜多家）

現在は住宅街になっていますが、多肥コミュニティセンターから約百メートル東側の東西方向の市道の南側隣接地で、かつて土堀で囲われた「しろ」の屋号を持つ宮本家の邸宅があった場所（東西四十五メートル、南北五十メートル程度）が、多肥を領地とした乃生のう氏の居城であったとされます。城の詳細は不明ですが、城に関する地名としては、北東方向に祠や五輪塔を寄せ集めた「城



写真2 城の神さん



写真1 船頭神社

の神さん」と呼ばれる場所があります。また、多肥小学校の北側一帯が「北門掛かりのたんぼ」と呼ばれ、北門には乃生氏の家宰である行司市正ぎょうじいちのりの居宅があったとされ、現在「お茶荒神」がある場所と言われています。城域がそこまで広いとは考えにくいですが、古い地籍図を見ると、「城の神さん」から西に向かって、さらに南へ折れる細長い地割が見られ、城を囲む堀の可能性が考えられることから、この辺りまでが城であった可能性が考えられます。

城主の乃生氏は阿野北条郡高屋郷神谷かんだにに住む神谷兵庫ただすけ忠資から始まる家系です。忠資は細川氏に仕え、戦功があ

ったことから、乃生・木沢（現在の坂出市王越町）の二ヶ村を賜り、乃生の西山城を居城とし、乃生氏を名乗るようになったとされ、さらにその後、多肥郷（生駒期には千三百五十二石）が増されました。本領の乃生・木沢の両村は平地が少なく石高も低い土地（生駒期には乃生二百三十五石、木沢百五十石余）ですが、備讃瀬戸を望む地にあり、海上へ勢力を強めていったと考えられ、忠資の長男の縫殿助忠雄が香西氏の船大将となり、次男の孫兵衛忠高が家督を継ぎました。『南海通記』によると、香西氏の船大将は乃生縫殿助、植松右近、その下に乃



図1 高木城跡周辺地籍図

（香川県教育委員会 2003 より抜粋）

生孫兵衛、池見太郎兵衛、渡辺市之丞、渡辺三之丞がいることが記されており、乃生氏は香西氏の水軍の中核をなしていたことがうかがえます。縫殿助の家系（忠雄の後、重春、忠重と続く）は、香西氏の滅亡後、讃岐の領主となった生駒親正に召し出され、船大将として千五百石が与えられました。

一方、次男の忠高の家系は、覚兵衛忠義を経て孫兵衛元忠の時に乃生にあつた六字明王像を伴つて多肥に居城を移しています（多肥乃生氏・初代元忠）。多肥乃生氏は、天正年間（一五七三〜九二）に領地を失い帰農したと伝えられており、『桜井八幡由来記』には、十河存保とよしみを通じ、香西氏と戦い、滅ぼされたとされますが、詳細は不明です。

子孫は多肥に住み、文禄三年（一五九四）に六字明王を祀つた観音堂を創建したとされています。観音堂は二代与左衛門頼景によつ

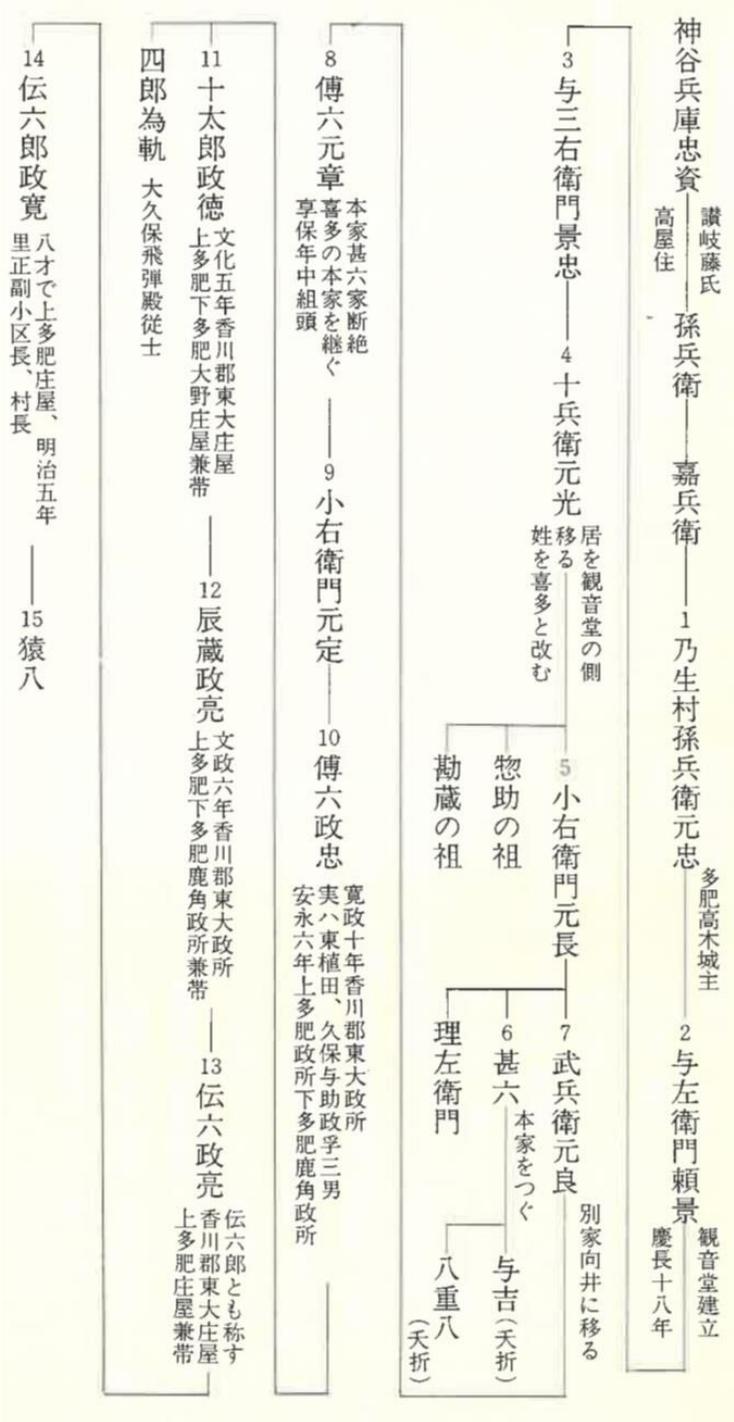


図2 喜多家系図
(多肥郷土史編集委員会 1981 より抜粋)

て、慶長十八年（一六一三）に現在地に再建しています。さらに、四代十兵衛元光の時に、家運の繁栄を期待し、乃生氏を喜多氏と改め、先祖伝来の観音堂の北に家を移しています。

五代小右衛門元長の後、次男の甚六（六代）が跡を継ぎましたが、断絶したため、向井（観音堂の南西）に分家していた長男の武兵衛元良（七代）が観音堂の法要や先祖の供養を継ぐことになりました。十代傳六政忠になると、安永六年（一七七七）に上多肥の庄屋となり、飢饉の際に扶持米を供与するなど、救済に努めています。

享和元年（一八〇一）に喜多家で初めて香川郡東の大庄屋となるとともに、前後して上多肥に加え、鹿角、下多肥、東谷の庄屋も兼務しました。その後、幕末まで代々大庄屋を務めましたが、特に、十一代十太郎政徳は、衰退していた観音堂の復興を計画した父に代わり、文化九年（一八一三）に百五十両余の資金で、本堂、食堂、南北両門を新築しました。

4 さいれんじ 西蓮寺墓地

現在、旧状はとどめていませんが、向井の喜多家の南西に櫻木神社の別当寺西蓮寺の墓地があります。歴代住僧の無縫塔むほうとうが建ち並ぶ中、豊島石製

増澄の墓



写真3 西蓮寺墓地

の五輪塔や、文化年間（一八〇四〜一八）に観音堂を復興した増澄ぞうちょうの墓などが目立ちます。

5 香東川の旧河道と多肥地区の出水ですい

讃岐では早くからため池を造築して水不足を解消してきましたが、これに加え多肥地区周辺では、出水と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで、両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきました。しかし、昭和五十年（一九七五）の香川用水の通水によって、農業用水の確保の不安が払拭された反面、地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに、ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつあります。

高松平野は、讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野です。西から本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川といった河川が北流していますが、なかでも香東川が平野の形成に大きな影響をおよぼしており、現存の春日川以西が香東川による沖積平野と言われています。現在、石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は、十七世紀初めに西嶋八兵衛により流路が一本化されたもので、それ以前には現在の香川町大野付近から東へ分岐した後、平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していました。現在の御坊川が香東川流路一本化直前の主流路ですが、流路は時代とともに西側へ移っており、弥生時代頃には多肥周辺に旧河道がいくつかあることが微地形や発掘調査成果から判明しています。高松平野を流れる諸河川の中流域



図3 弥生時代の旧河道

は伏流し、表層は涸れ川になることが多く、旧河道はその伏流水の通り道ともなっており、地下水位が高くなり、自噴地下水脈である出水が多く見られます。今回の探訪地の周辺では、肥間川ひまが旧河道の名残で、櫻木神社付近から北東方向へ、下池、長池、大池を結ぶ流路や、桜井高校の中央を北流する流路など、数本の旧河道が知られており、それに沿って内里うちり出水、新出水、お椀出水、肥間川出水、栗木くりのき（波羅井はらい）出水、平井出水などが見られます。

これらの出水は多肥地区の水源になっている出水がほとんどですが、このうち平井出水は、多肥にありながら郡境を越えた山田郡下林村の用水源になっており、山田郡の管轄



写真5 新出水



写真4 内里出水



写真7 平井出水



写真6 栗木出水

下に置かれていました。しかし、地形の関係で、平井出水よりも上方にある多肥の用水源である肥間川出水、栗木（波羅井）出水の水は、伏流して平井出水に吹き出るため、平井出水や水路を浚えようと、多肥の出水の水量に影響してしまうことから、多肥の百姓にとっては、自分たちの用水が必要以上に下林村に奪われるのを黙って見ていることはできず、山田郡の普請方で行う毎年の用水路浚え、平井出水浚えの度に、山田郡と香川郡の間で水利紛争が繰り返されていました。

6 のしろ 野郷神社

櫻木神社の境外末社で祭神は不明です。天保四年（一八三三）の西蓮寺社僧の記録では、祭日は九月二十三日（旧曆）となっています。現在は十月十一日が祭日となっています。



写真8 野郷神社

7 円成庵えんじょうあん（観音堂）と香川県指定有形文化財木造六字明王立像りゅうじょう

昔から「多肥の観音さん」として地元の人に親しまれ、その容姿から「片足観音」、「六手観音」とも言われており、仏像の異様な姿から畏敬の念をもつて崇拝してきました。「六字明王」とも呼ばれ、観音堂を「六字明王堂」とも呼んできました。

延享二年（一七四五）の序文を有する『翁媪夜話』おおうやわには、神谷兵庫忠資ただすけが細川氏に属し功をあげ、乃生・木沢（坂出市王越町）を与えられ乃生氏と称するようになり、代々、六字明王を尊信し安置しており、その後、多肥郷を加増され、曾孫の孫兵衛元忠の代に多肥に移り城を構え、六字明王も祀ったとされます。乃生氏は天正年間（一五七三〜九二）に領地を失い、子孫は四代十兵衛の時に、乃生氏から喜多氏と改め、六字明王を護持し続けました。観音堂の創建は文禄三年（一五九四）で、慶長十八年（一六一三）の再建時に現在地に建てられたと考えられています。なお、観音堂の庵号「円成庵」は創建時の寺僧円成師が慶長年間（一五九六〜一六一五）に隠居屋にしたことによるものです。

本尊として安置されているのは、一面六臂びの六字明王立像です。六字明王は、調伏や息災を祈る密教の修法「六字経法（六字法）」の本尊とされた像で、この修法は平安時代末期の院政期、白河・鳥羽院などの周辺でしばしば行われていましたが、現在、彫刻として平安時代に遡る国内唯一の六字明王像です。ほぼ等身大の像で、菩薩形

の面相に、左右第一手は胸前に構えて印を結び、ほか四本の手に後補のものではありませんが持物を執っています。条吊へんじりょうを左肩から右脇腹へと斜めに懸け、腰下に裙くんと腰布を着け、両肩に天衣てんねをかけて垂らし、右足を左足背後に跳ね上げ、左足一本で立っています。

平成三十年（二〇一八）度の保存修理では、後補の彩色が取り除かれ、構造や保存状態が確認されました。檜材の寄木造で、頭体幹部は正中線で矧はぐ左右二材から彫出し、内削りうちくした後、三道さんみち（首のしわ）下で割首しています。両肩先以下、各手の肘及び手首先、左足先をそれぞれ矧いでいますが、右足先は本体と同材から彫出しています。表面は黒漆の塗布が部分的に認められ、当初は漆下地に彩色を施していたとみられます。また、後補部は冠部、髻せりり左方、右耳朶じだ、左右第二手ほか、手先の一部、裙裾部、左足柄ほて柄などで、右足先を背後に跳ね上げるなどの像容に関わる主要部に当初材を残す良好な保存状態が明らかとなりました。



写真9 木造六字尊立像（右：修理前、左：修理後）

8 櫻木神社

祭神は応神天皇、神功皇后、玉依姫命です。別当寺は西蓮寺^{さいれん}、祭礼は八月十五日です。仁和年間（八八五〜八八九）、桜井権督^{ごんのかみ}によって造営され、その後、天文二年（一五三三）、西蓮寺住僧で権督の後裔である沙門長慶が、寺の檀家で同じ桜井連公^{むらじのきみ}の子孫である乃生土佐守義照と復興造営を行ったとされます。

江戸時代以降、別当や氏子によって寄進、修築などが頻繁に行われており、特に文政十年（一八二七）に本殿を再建したにもかかわらず、天保十二年（一八四一）に地盤の崩壊と白蟻被害によって再度の再建が必要になり、天保十五年（一八四四）に本殿及び石垣が造営されました。その後も幣殿、拝殿の再建、別当寺西蓮寺の再建など嘉永七年（一八五四）まで修築が相次ぎ、氏子の寄進は莫大なものとなりました。

明治になると、神社神道の復興が強く叫ばれるようになり、明治九年（一八七六）に上多肥、下多肥両村の氏子の寄進によって隨身門が建設されましたが、隨身の鎮座の式典をあげることができませんでした。下多肥の福



写真 10 櫻木神社

田音次郎はこれを嘆いて、春日村の伏見九平太に天忍日命、天津久米命の二柱の隨身像を作らせ寄進し、明治十七年（一八八四）九月に鎮座式を執り行いました。

神社社叢は、高木層にクログネモチ、ホルトノキ、クスノキ等の広葉樹、及びエノキ、ムクノキ、ケヤキ、ハゼノキ等の夏緑樹が見られ、後者の優先する混交林を形成しています。また、ウバメガシは胸高幹周が二百センチもあり、県下有数の大木です。「櫻木神社の森」として平成四年（一九九二）に香川県指定自然記念物（県みどり保全課）に指定されています。

＊参考文献

- 秋山忠一九八二『古城跡を訪ねて』高松市歴史民俗協会・高松市文化財保護協会
- 香川県教育委員会二〇〇三『香川県中世城館詳細分布調査報告』
- 香川県神職会一九三八『香川県神社誌』
- 角川日本地名辞典編纂委員会『角川日本地名辞典 37 香川県』株式会社角川書店
- 高松市教育委員会二〇〇五『日暮・松林遺跡』
- 多肥郷土史編集委員会一九八一『多肥郷土史』
- 楽浪文化財修理所二〇一九『文化財修理報告書 香川県高松市多肥上町 行徳院円成庵 木造 六字尊立像

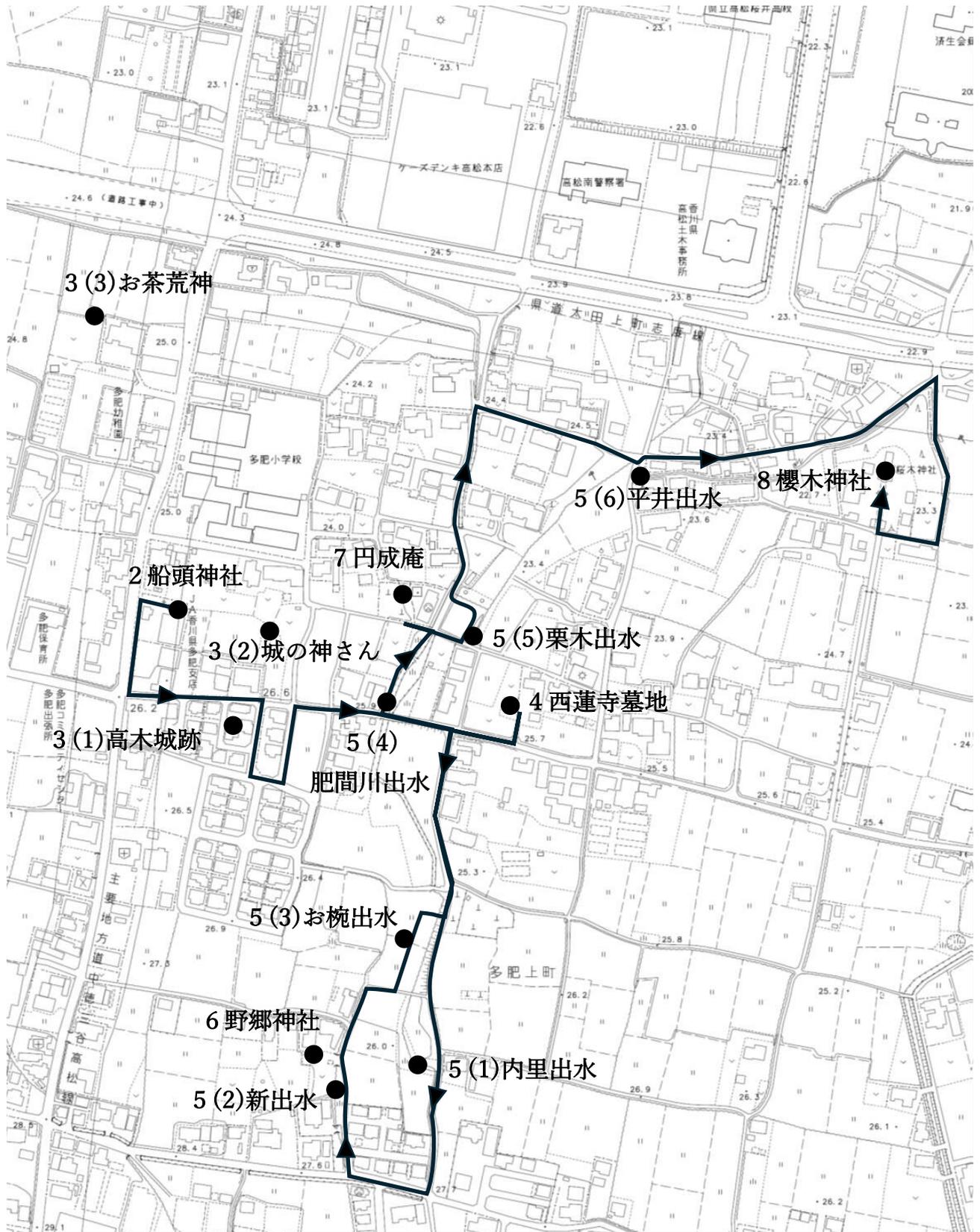


図4 探訪地位置図